

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	山田淳子
2. 審査委員	主 査：（滋賀大学教授）松田繁樹 副主査：（滋賀大学教授）辻延浩 委 員：（滋賀大学教授）大平雅子 委 員：（岐阜大学准教授）上田真也 委 員：（岐阜大学准教授）林陵平
3. 論文題目	小学生の社会情動的スキルの実態と体力・運動能力および生活習慣との関係
4. 審査結果の要旨	教科教育実践学専攻 生活・健康系連合講座 山田淳子から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和7年1月28日（火） 17時00分～18時30分 場 所：オンライン 1. 学位論文の構成と概要 第1章 序論 第2章 先行研究 第1節 社会情動的スキル評価尺度について 第2節 子どもの社会情動的スキルの実態について 第3節 子どもの社会情動的スキルと体力・運動能力との関係について 第4節 子どもの社会情動的スキルと生活習慣との関係について 第3章 問題 第1節 問題の整理 第2節 研究課題の設定 第3節 仮説の設定 第4節 用語の整理 第5節 研究の限界 第4章 研究の方法 第1節 仮説検証の手順 第2節 対象者 第3節 測定項目 第4節 データの収集方法 第5節 分析方法

第 5 章	研究課題Ⅰ：社会情動的スキル評価尺度の開発
第 1 節	目的
第 2 節	調査 1
第 3 節	調査 2
第 4 節	今後の課題
第 5 節	社会情動的スキル評価尺度の開発に関するまとめ
第 6 章	研究課題Ⅱ：社会情動的スキルの実態
第 1 節	目的
第 2 節	研究方法
第 3 節	結果
第 4 節	考察
第 5 節	研究の限界および今後の課題
第 6 節	社会情動的スキルの実態に関するまとめ
第 7 章	研究課題Ⅲ：社会情動的スキルと体力・運動能力との関係
第 1 節	目的
第 2 節	研究方法
第 3 節	結果
第 4 節	考察
第 5 節	社会情動的スキルと体力・運動能力との関係に関するまとめ
第 8 章	研究課題Ⅳ：社会情動的スキルと生活習慣との関係
第 1 節	目的
第 2 節	研究方法
第 3 節	結果
第 4 節	考察
第 5 節	社会情動的スキルと生活習慣との関係に関するまとめ
第 9 章	結論および今後の課題
第 1 節	要約
第 2 節	仮説の検証
第 3 節	結語
第 4 節	今後の課題
引用参考文献	

第 1 章では、研究の背景を詳細に説明し、本研究の目的を示している。本研究の目的は、小学生の社会情動的スキルを評価する尺度を開発することと、そして開発した尺度を活用して小学生の社会情動的スキルの実態と社会情動的スキルと体力・運動能力、生活習慣（身体活動・運動，食事，睡眠，スクリーンタイム）の関係を明らかにすることであった。

第 2 章では、先行研究を 4 つに分け、まとめている。4 つとは、「社会情動的スキル評価尺度について」、「子どもの社会情動的スキルの実態について」、「子どもの社会情動的スキルと体力・運動能力との関係について」、「子どもの社会情動的スキルと生活習慣との関係について」であった。

第 3 章では、先行研究の問題を整理し、研究課題と仮説を設定している。用語の整理および研究の限界についてもまとめている。

第 4 章では、研究方法について、仮説検証の手順，対象者，測定項目，データの収集方法，分析方法を具体的に記載している。

第 5 章（研究課題Ⅰ）では、小学校中学年以上の児童を対象とした社会情動的スキルを評価する尺度の作成を試みている。分析の結果，作成された社会情動的スキル評価尺度は，十分な信頼性および妥当性（構成概念妥当性）を備えており，小学生の社会情動的スキルを測定・評価できることを明らかにした。

第6章（研究課題Ⅱ）では、小学校中・高学年の児童の社会情動的スキルの実態（学年差および性差）を明らかにしている。社会情動的スキル合計得点は学年進行とともに低下すること、忍耐力と自尊心においては6年生で男子が女子より有意に高値を示し、特に女子において6年生が低下すること、自己制御、敬意、思いやりでは女子が男子より有意に高値を示し、社交性は3年生、4年生、5年生が6年生より有意に高値を示すことを明らかにしている。

第7章（研究課題Ⅲ）では、小学校中・高学年の児童の体力・運動能力と社会情動的スキルの関係を明らかにしている。小学生中・高学年児童の体力・運動能力と社会情動的スキルの間に関係があること、また、その関係は社会情動的スキルの下位尺度により異なること、6年生は他の学年より関係が明白であることを明らかにしている。

第8章（研究課題Ⅳ）では、小学校中・高学年の児童の社会情動的スキルと生活習慣の関係を明らかにしている。小学生中・高学年児童の社会情動的スキルと生活習慣の間に関係があること、運動やスポーツの実施が他の生活習慣よりも社会情動的スキルとの関係が強いことを明らかにしている。

第9章では、4つの研究課題をまとめ、結論と今後の課題を記載している。

2. 審査経過

（1）研究の独創性及び発展性

近年、幼少期の社会情動的スキルの獲得は重要であることが報告されている。しかし、我が国では児童を対象とした社会情動的スキルに関する研究は進んでいなかった。本学位論文は小学生の社会情動的スキルを包括的に評価する尺度を開発し、それをもとに小学生の社会情動的スキルの実態、社会情動的スキルに関わる関連要因の検討を行った。研究が進んでない状況の中で、尺度開発から関連要因の検討までを行っており、学位論文を構成するⅠ～Ⅳの研究課題はいずれも高い価値があり、独創性を備えている。また、本学位論文にて小学生の社会情動的スキルに関する基礎的な知見を得られたことにより、社会情動的スキルに関する研究の進展が見込まれ、大きな発展性を有している。

（2）学校教育実践への貢献および社会貢献

研究課題Ⅰで作成した評価尺度は今後、社会情動的スキルの向上を目的とした教育への介入研究など、児童の社会情動的スキルに関する研究において活用できると考えられる。研究課題Ⅱ～Ⅳの結果についても、社会情動的スキルに関する研究の発展に寄与する基礎的な知見となる。また、教育現場へ還元できる内容としては、課題研究Ⅱの結果は、子どもの教育全般において各年齢の発達段階に応じた指導に活かすことができるだろう。さらに、研究課題ⅢおよびⅣの結果は、運動、スポーツ、学校体育および運動習慣の重要性を家庭、地域および学校に発信する際に役立つ知見となるであろう。以上、本研究で得られた結果は、社会情動的スキルに関する研究の発展や教育現場への示唆に繋がる価値ある知見であると考えられる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は山田淳子の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。